

17世紀フランスの女性作家たち

森本 信子¹

はじめに

17世紀のフランスでは、文学はベル・レットルと呼ばれ、韻文では叙事詩つまり戯曲が、散文では雄弁が高貴なジャンルとして君臨し、小説は散文の中でも卑俗なジャンルだとされていた。しかし、実際には、小説は多くの読者を獲得していた。主だった小説の出版記録を見ると、17世紀前半はゴンベルヴィル、オノレ・デュルフェ、シャルル・ソレル、ジャン・ピエール・カミュら、男性作家の名が並ぶ²。ところが17世紀後半になると、マドレーヌ・ド・スキュデリーの『クレリー』を皮切りに、女性作家の作品が一気に増えていく。これは、17世紀前半から始まった貴族の女性によるサロンと呼ばれる社交場が全盛期を迎えたことと無縁ではないだろう。サロンは、女性たちが洗練された言葉遣いを身に付ける知的訓練の場となっていた³。大貴族ランブイエ侯爵夫人の「青い部屋」と呼ばれたサロンで当代一流の文人たちとの知己を得たスキュデリー嬢は、自ら「土曜会」と呼ばれるサロンを主宰し、詩の朗読や文学談議を楽しんでいた。

一方、ちょうどこのころ、貴族によるフロンドの乱の失敗により、社会が一気に中央集権へと向かい始め、ルイ14世の絶対王政が確立していく。当然、戦う場を失い政治的な力を失った男性たちの行動様式や心理も過去のものから変化していくはずだ。また、貴族の衰退とともに、経済力を持った新興勢力が台頭し、文化の担い手の裾野が広がっていく。フランス社会の大きな変革期に、女性作家たちはどのように社会をとらえ、どんな試みをしたのだろうか。この論考では、いくつかの観点から女性作家たちの共通点を探り、彼女たちが小説の姿をどう変えていったかについて考察する。

1 女性作家と社会

17世紀では、1649年にスキュデリー嬢が兄のジョルジュとの共著として刊行した『ル・グラン・シリユス』が女性作家による作品の登場となる。そのスキュデリー嬢が1654年から1669年にかけて出版した長編『クレリー』が多くの読者の間で人気を博した。たとえば1678年に『クレーヴの奥方』という傑作を著すことになるラファイエット夫人は、1655年8月から11月にかけての手紙で、『クレリー』の新刊を心待ちにしていることを繰り返し述べている⁴。ラファイエット夫人は『クレーヴの奥方』の他に、1662年には自身初の小説『モンパンシエ公爵夫人』を匿名で、1669年に『ザイド』をスグレの名で刊行した。王族の一人であるモンパンシエ嬢は、歴史資料としても価

¹ 薬学部第4英語研究室

² N. Grande, *Stratégies de romancières-De Clélie à La Princesse de Clèves (1654-1678)*, Paris, Honoré Champion, 1999, p.425.

³ サロンの常連たちはプレジューズと呼ばれ、主な人物や言い回しを載せた『プレジューズ辞典』がある。A. B. Somaize, *Le grand dictionnaire des précieuses (1661)*, Genève, Slatkine Reprints, 1972.

⁴ Madame de Lafayette, *Œuvres complètes*, éd. Camille Esmein-Sazarin, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2014, pp.858-862. たとえば、「私に『クレリー』をくだされば、あなたの友情を疑う余地はございません」などと書いている(p.861)。

値がある自伝『メモワール』の他、1659年に『パフラゴニア妃物語』という小説を刊行した。特に多くの小説を残したのはヴィルディウ夫人で、詩や戯曲で才能を發揮した後、1661年刊行の『アルシダミー』から小説の執筆へと転換した。ヴィルディウ夫人が1676年に刊行した『愛の混乱』には、『クレヴの奥方』で物議をかました、女主人公の夫への告白によく似た場面があることが知られている⁵。

以上、現在でも比較的容易に著書を手に入る4人の他にも、17世紀後半には、アンヌ・ド・ラ・ロッシュ・ギラン、ラ・カルプルネード夫人、マルセ夫人、メルヴィル夫人、サルヴァン夫人、カトリーヌ・ベルナル、ドルノワ夫人、コモン夫人などの女性作家たちがいた⁶。現在では彼女たちの名がフランス文学史に登場することはほとんどないが、小説というジャンルの創成期に何人もの女性たちが著書の出版に至ったことは、小説史を考えるうえで覚えておくべき事実である。

これらの女性作家たちの生き立ちに関する、ナタリー・グランドによる研究成果⁷から、本論考に関連する項目を紹介すると次のようなことが挙げられる。まず、ルイ14世のいここにあたるモンパンシエ嬢以外は、貴族とはいっても下級の家柄の出身であり、貴族社会の中心にいたわけではないという共通点がある。ラファイエット夫人も、母の再婚で身分が格上げされたとはいえ、下級貴族の生まれである。王族の一員であるモンパンシエ嬢にしても、一時期、宮廷から追放されており、政治的疎外の経験がある。アンヌ・ド・ラ・ロッシュ・ギランは、カトリックではなくユグノーの家系であったという。女性作家たちは、社会的な周辺にいるという根本的な自意識の下、小説執筆に向かったのではないかと思われる。

また、スキュデリー嬢は生涯独身であったが、他にも独身者が多く、既婚であっても別居や死別で夫と離れており、堅固な婚姻関係に安住する生活ではなかった点も共通している。ヴィルディウ夫人の場合、ヴィルディウ氏とは結婚の約束をしてすぐ死別しており、実際には晩年の短期間、別の男性と結婚したものの再び死別したこと、「ヴィルディウ夫人」の名は小説出版のためのペンネームとして使われたとも考えられる⁸。スキュデリー嬢とヴィルディウ夫人が17世紀の女性作家の中でも特に多くの作品を残したことは、妻であり母であるという社会通念が要請する女性像から逸脱した彼女たちにとって、自律的な社会生活能力を持つことが生存にかかわる切実な問題であったことを示している。まさに生きるための職業として小説を書いた作家達であった。一方、ラファイエット夫人は由緒ある貴族と結婚し2人の息子がいたが、夫とは長期間の別居生活を送った。その中で、当時の女性としては珍しく夫に代わって財産管理の実務を担っており、彼女もまた、社会通念に沿った女性像とは異質の人生を送った。

以上のように、何らかの点で社会の中で異端の要素を抱えていた女性作家たちは、小説というジャンルにどのような新奇性を付加していくのだろうか。

⁵ これら2つの小説の類似については、出版直後から指摘されてきた。Valincour, *Lettres à Mme la marquise *** sur le sujet de La Princesse de Clèves* (1678), Tours, Université François Rabelais, 1972, p.215.

⁶ Grande, *op.cit.*, p.185.

⁷ *ibid.*, p.189~p.247.

⁸ N. Grande, E. Keller-Rahbé, *Villedieu, ou les avatars d'un nom d'écrivain(e)*, « Littérature classiques » 2006/3 No 61.

2 女性作家と歴史記述

古典主義理論に大きな影響を与えた『詩法』を書いたボワローは、小説は低俗なジャンルとの批判を展開していた⁹。それに対し女性作家たちは、小説が戯曲や詩に劣る亜流ジャンルであることを逆手にとって、書き手としての自由を手に入れている。歴史上の事実と人物を借用して執筆のアリバイを作った上で、同時代の社会に潜む問題を描き、心理分析、特に恋愛心理の分析を展開するものとして小説を発展させていった。

『クレヴの奥方』は16世紀のフランス宮廷が舞台だが、同時代人ヴァランクールが指摘したように、冒頭を読んだだけで、この小説はルイ14世の宮廷を土台に作られていると読者は感じながら読むことになる¹⁰。冒頭にアンリ2世の名を出すことで、著者ラファイエット夫人は執筆の自由を手に入れ、そこで展開される社会や人物に対する賛辞も批判も、同時代の読者にとっては現代的な意味を持つものとなる。ヴィルディウ夫人は、ルイ14世をはじめ、王家との密接な関係の下で小説を書いた。1670年刊行の『寓話集』と1671年刊行の『偉人たちの恋』は、ルイ14世にささげられており、大貴族たちや外国の宮廷にささげられたものもある¹¹。過去の史実が骨格であることはラファイエット夫人と同じだが、さらに彼女は自分の作品を「ちょっとしたお話」や「がらくた」と呼んで、権力者の不興を買わないような伏線をあらかじめ張っておくことを忘れない。自らの安全を確保したうえで、古代の主人公たちに現在の宮廷人を反映させた。偉業への賛辞だけでなく、悲惨な末路や不道德な情事などがちりばめられ、同時代の読者にはルイ14世の宮廷を容易に連想させるものだったはずだ。ヴィルディウ夫人もまた、自らの社会批判を巧妙に小説に盛り込んだと言えよう。

また女性作家たちは、歴史的事実に女性の置かれた現実や女性の心理を絡ませることで、歴史を突き動かした要因を多層化した。男性の英雄的行為だけで歴史を構成するのは不完全であり、女性の心理や意思の関与で補完する必要があると考えていた。ヴィルディウ夫人は、『ギリシャ恋愛史』の冒頭で「有名な作家たちは古代ギリシャ人たちの偉業を書き、私たちに伝えてきました。(中略)しかしまだ誰も有名なギリシャの女性たちについて語った人はいません。(中略)けれども、国家というものは男性と女性の両方から成り立つように思えますので、偉大な男性だけを描くのはギリシャを半分しか描いていないことになります。この描写に少し筆を加えましょう。女性たちについて今こそ何かを語りましょう」と述べ、女性史を担う気概を表明している¹²。英雄小説の流れにあったスキュデリー嬢もまた、歴史上の英雄たちの恋愛に、独自の分析的視点を加えることで、新しい歴史記述を行った。17世紀の女性作家たちは、女性という、歴史を見る新たな視点を取り入れるこ

⁹ ボワローは『風刺詩』の中で、スキュデリー嬢の『クレリー』を名指して揶揄した。

¹⁰ Valincour, *op.cit.*, p.5. ヴァランクールは「最初の4行には大変驚きました。著者のように現在の宮廷をよく知る人が、『アンリ2世在位の最後の数年ほど、フランスで豪華や優雅が現れたことはなかった』など書くことができるのでしょうか。彼はおそらく、自分がルイ14世の治世に生きていることを忘れたのです」と書き、アンリ2世の名は小説を批判から守るための口実だと考えていた。

¹¹ Ch. Simonin, *Des seuils féminins ? Le péri-texte chez Mme de Villedieu*, « Littérature classiques » 2006/3 No 61, p.155.

¹² Grande, *Stratégies de romancières-De Clélie à La Princesse de Clèves (1654~1678)*, p.382-383.

とで、歴史を重層的に描く可能性を広げ、小説の発展に寄与したと言えよう。

3 変容する女性像・男性像

女性作家による小説の主人公は、例外なく女性である。彼女たちが描いた女性像にはどんな特徴があるだろうか。

17世紀前半が終わるころには、英雄的な行為によって勝利の栄光を手に入れる「強い女」という概念がすでに生まれていた¹³。スキュデリー嬢は1642年に『偉大な女性たち』を刊行しており、小説の中にも「強い女」を体現する人物を登場させている。その極端な例が、『クレリー』に登場するテュリーという暴力的支配者としての女性である。テュリーは最初の夫を殺し、父親を殺し、再婚したタルカンと共謀して王位を略奪する。こういった人物造型が、女系の戦士集団であるギリシャ神話のアマゾーンのイメージが影響しているとの指摘もある¹⁴。ヴィルディウ夫人の最初の小説『アルシダミー』には、代々王冠が女性のみを引き継がれる王国が登場する。ここでは、女性たちは、アマゾンのように騎乗して弓矢で戦う代わりに、強い意志で野心を実現していく。「強い女」の描出は、男性に従属する女性像、強い男性に守られるべき女性像を覆し、女性の強靭さと独立性を認める考え方の表れである。

ラファイエット夫人の『クレーヴの奥方』では、また別の形で「強い女」が登場する。たとえば、ヴァランチノワ侯爵夫人である。この女性は、親子である二人の王の愛人となり、意のままに操って権勢を誇る。王たちは彼女に完全に支配され、「ヴァランチノワ侯爵夫人のシンボルカラーやイニシャルの模様が至る所に飾られ、彼女自身も、やがて結婚する孫娘のラマルク嬢が身に付けるような装いで姿を現した」¹⁵という状況は、ヴァランチノワ侯爵夫人こそが王国の支配者として君臨しているかのようなようである。クレーヴの奥方の母シャルトル夫人が語るヴァランチノワ侯爵夫人についての挿話では、王たちを誘惑する巧みさ、自分と対立する派閥への容赦ない仕打ちなどが語られ、この女性はまさに「強い女」の典型と考えることができる。

『クレーヴの奥方』では、ヘンリー8世の寵愛を受けたのち結婚したが処刑されるという稀有な人生を送ったアン・ブーリンについての挿話でも、アン・ブーリンの大胆さと精神的な強靭さが語られる。イングランドの出身でありながらフランス滞在で吸収したフランス文化の素養、新教への接近、ヘンリー8世と結婚するための政治的戦略など、周囲と異質であることを恐れない野望に満ちた女性として語られる。処刑という悲惨な結末を迎えたが、困難にひるまずに野心の実現に突き進んだアン・ブーリンもまた「強い女」である。

トゥールノン夫人とテミーヌ夫人に関する『クレーヴの奥方』の逸話も「強い女」の観点からの解釈が可能である。トゥールノン夫人は夫の死後貞淑な未亡人を見事に装いながら、2人の男性に同時に結婚を約束していたが、彼女の急死によって騙されていたことを知ったサンセール侯爵の絶望が

¹³ たとえば1645年の*La femme héroïque*(Père du Bosc)や、1647年の*La galerie des femmes fortes*(Père Le Moyne)などがある。

¹⁴ Grande, *op.cit.*, p.35. 女性だけの戦士集団アマゾンでは、男性は子孫を増やす道具でしかなく、女性は男性の力を必要とせずに独立した統治を実現していたという。

¹⁵ *Œuvres complètes*, p.331

描かれる。この挿話は、女性がとるべきでない振る舞いの典型を、夫クレヴ公が妻に教える形で語られるが、女性が男性に対して優位に立ち翻弄する恋愛における「強い女」の例示だと解釈することもできる。また、テミーヌ夫人の逸話では、恋人シャルトル公の浮気を知ったテミーヌ夫人が、他に恋人がいるふりをしてシャルトル公の嫉妬心をたきつけ、再び引き付ける計画が成功したところで別れを切り出す、というものだ。浮気を嘆きながらも、愛情を踏みにじった男性に対して復讐の喜びを求め行動する女性である。この挿話もまた、恋愛というゲームにおいて主導権を握り優位に立つ「強い女」の一つの形を示している。

以上のように、「強い女」のテーマは、17世紀の中頃から様々な形で女性作家たちの小説で描かれ続けていった。神話のアマゾーンの血なまぐさい戦場は優雅な宮廷に取って代わられるが、人間関係の勢力争いにおいて、自分の欲望を満たすため果敢に戦う女性たちが描かれる。自我を貫くために念入りに策を練り行動できる力を持っている女性たちだ。もちろん、「強い女」への注目は、当時のサロンの隆盛という社会現象が背景にあるだろう。サロンでは、洗練された言葉遣いが追及されたが、それは女性の知的能力を格段に高めていった。言葉を駆使することで会話を支配し自己を確立していった女性たちが小説を書いたのである¹⁶。17世紀は、教養と言葉という武器を手に入れた女性たちに自立の願望と強さへの意思が生まれた意識変革の時代であった。女性作家たちの登場人物にはその願望と意思が投影されている。

女性の変容が描かれているとすれば、男性の描き方の変化にも注目する必要がある。『クレヴの奥方』の挿話について男性に焦点を当てて見直してみよう。ヴァランチノワ侯爵夫人の挿話では、ヴァランチノワ侯爵夫人は完全な支配者であり、支配されている国王アンリ2世は、いつも彼女の顔色をうかがい、憤慨すればむしろそれで彼女が気分を害したのではと心配するような弱気な男性である。アン・ブーリンと国王ヘンリー8世の関係も、処刑の引き金となった義理の弟への激しい嫉妬心も含めて、ヘンリー8世がアン・ブーリンの言動に翻弄される構図はアンリ2世と変わらない。トゥールノン夫人の生前の裏切りを知ったサンセールは、自分で自分の絶望を処理することができず、友人と兄弟を頼り、涙を流すことしかできない。別れを切り出すテミーヌ夫人の手紙をなくしたシャルトル公は、それによって王妃の好意を失わないようにするために、友人たちの力を借りざるを得ない。さらに別の女性との関係も清算できず、結局王妃の信用を失うことになる。このように、男性たちは誇りと自制心を失った者たちばかりである。自己の感情を制御して、問題の解決に向かう強さがみられない。「強い女」とは対照的に、男性の女性的な弱さが描かれる。17世紀後半という時代は、従来の男性像、女性像がともに変容していった時代だと考えられ、女性作家たちはその内実の証言者の役割を担ったと言える。

4 結婚と恋愛

次に、女性作家たちが結婚制度と恋愛をどう描いているかを考察する。

ナタリー・グランドは、女性作家たちの作品では、過剰なまでの貞節観を持つ人物が登場し、そ

¹⁶ たとえば『クレリー』は多くの会話文から成り立ち、サロンでの会話の再現として読めると考えられている。

れは男性との性的関係への恐れから来ていると指摘する。その根本原因として、父権が強大であった当時のフランスでは、結婚は父親の命令によって決まり娘の意思が無視されていた、という事実があるという¹⁷。経済的理由或いは政治的理由のために結婚が手段として使われ、決定権を父親が握っていたことを示す場面は少なくない。『クレリー』の中には、「私の娘は私の支配下にある。私が良いと思う相手と結婚させるつもりだ」と父親がはっきり述べる場面がある¹⁸。ヴィルディウ夫人の『愛の日記』には、王族同士の政略結婚の道具となるフランソワ 1 世の娘が登場し、ラファイエット夫人の『モンパンシエ公爵夫人』の主人公もまた、他の男性を愛しながら父親の決めた相手と結婚した。『クレヴの奥方』では、主人公の父親は幼いころ他界しており、母親のシャルトル夫人が娘の教育の一切を担っていた。彼女は、夫を愛し夫から愛されることが女性の幸せだと教えていたにもかかわらず、結婚相手は愛情とは全く無関係に家柄と勢力関係だけで選ぶとする。シャルトル夫人は、結婚における父権を完全に代行しているのだ。このような結婚を余儀なくされた娘たちにとって、結婚は愛情を伴うものどころか苦痛にもなりうる¹⁹。『クレヴの奥方』では、豪華な結婚の晩餐会に対する新婦の内面は全く触れられず、結婚後のクレヴ公への無関心と呼応する。彼女にとってこの晩餐会は、母親が取り仕切る儀式の一つでしかなかったことが印象付けられる書き方になっている。このように、17 世紀の女性作家の小説では、結婚は女性にとって父権への従属の制度であり、結婚相手は愛情の対象となりえない存在として描かれることが多い。

結婚による従属関係を意志的に拒む形が、結婚せずに独身を貫くことである。スキュデリー嬢は、小説の登場人物に結婚しない自由について語らせ、互いを束縛しない恋愛の可能性について語らせた。『クレリー』には、恋愛心理を細かく分析し分類した「恋愛地図」が挿入され、その中に「優しい友情」と呼ばれる感情がある。この感情は、嫉妬や混乱を伴う激しい恋愛感情とは異なり、理性と意思によって制御された愛情のことである。この感情によって互いを束縛せず対等な恋愛関係を結ぶことができる。「優しい友情」が結びつける関係が、女性の自由意思を損なわない恋愛関係の理想として提示される。

クレヴの奥方が夫の死後ヌムール公と築こうとした関係は、このような恋愛関係だったのではないだろうか。ヌムール公との最後の会話で、自分の恋心が永遠であることをはっきりと認め、ヌムール公に対して面会は禁じるものの彼女への恋愛感情は拒まない。ヌムール公との再婚の拒否は、夫への貞節の固持であると同時に、嫉妬と混乱から自由な「優しい友情」の持続の決意でもあったのではないか。クレヴの奥方の旅の目的地がピレネーという宮廷から非常に遠い場所であったことは現実との乖離の大きさの象徴と考えられ、クレヴの奥方が求める関係が現実では実現しがたい観念的なものであることが暗示される。しかしクレヴの奥方には観念的な理想を貫く強さがあった。束縛から解放された理想的な男女関係が、女性の選択肢の一つになりうることを示した女性である。

¹⁷ Grande, *op.cit.*, p.82.

¹⁸ *ibid.*, p.50.

¹⁹ *ibid.*, p.51. グランドは例として、マルセ夫人著『クレオビュリン』の「婚礼の儀式は葬儀の儀式となり、床は墓となったかのようなようでした」という箇所を挙げている。

5 小説と道徳

小説は、ボワローによる低俗性への批判に加え、宗教界からは、不道徳な恋愛に満ちた、読者の魂を毒するものとして痛烈に非難された²⁰。小説の道徳性を否定するこういった批判に、スキュデリー嬢は「よく書かれた小説は、楽しみになるばかりでなく、精神を磨くはずです」²¹と書き、ヴィルディウ夫人は『恋愛史』の序文で「最も乱れた事柄の中に道徳的意味を凝縮しようと思いました」²²と書いて、小説は道徳的な模範を示すものと主張した。ラファイエット夫人の『ザイド』には執筆協力者と考えられるユエが『小説の起源について』と題された序文を添え、その中で小説は「最も優れた哲学者より道徳を教える」²³ものと述べた。女性作家たちには、小説は不道徳であるどころか道徳の模範を読者に教える意義あるものだという自負心があったのだ。

では、どんな道徳的価値を伝えようとしたのか、まず、スキュデリー嬢の『クレリー』の長い会話で披露される人物評を見てみよう。スキュデリー嬢のサロン「土曜会」ではポルトレと呼ばれる人物評が流行しており、『クレリー』の人物評はその再現と考えられる。セヴィニエ夫人を模したと思われるクララントという女性についての「あらゆる美しいものとあらゆる無垢な喜びを愛していますが、栄光については自分自身より愛しています。また特に秀でていいるのは、判断力があり、厳格にも下品にも孤独にもならず、紳士淑女についてのすべてを目にする豪華な宮廷で、世間の評判を保つ術を身に付けたことでした。彼女ほど、愛情深くとも情愛におぼれず、からかい半分を言っても悪意が混じらず、陽気であっても軽率にならず、的確であっても窮屈にならず、栄光に満ちていながら傲慢にならず、貞節でありながら厳格にならない術を知っている人はいません」²⁴というポルトレは、節度と理性を備えた貞淑な女性の理想像を示している。ここで、「栄光」という既存の価値観について「栄光を愛する」という言い方で女性の内発的な契機が語られていることと、「判断力」への言及に注目したい。価値への服従ではなく自らの意思で自発的に価値判断をする能力が重視されていると考えられる。道徳を自らの本質になるまで内面化し節度ある行動様式として実践する女性の魅力が語られているのである。

ラファイエット夫人の『クレーヴの奥方』の場合、クレーヴの奥方は誰よりも貞節と義務を堅持する女性として描かれる。この小説は「彼女の人生は、かなり短いものだったが、真似のできない貞節の鑑だった」²⁵という文で終わっている。「鑑」とは本来他者から真似されるべきお手本であるはずだが、ラファイエット夫人は「真似のできない」という一見矛盾する形容詞を加えることで、読者を物語世界へ呼び戻し「鑑」の内実を反芻させる。「貞節」に関してクレーヴの奥方が他と異なっていたのは何だろうか。それは、貞節という規範について執拗なほど自問自答を重ね、最終的に確固たる意志で隠遁を選んだことだ。彼女は、自分の思考を基に価値を選択し、たとえ前例がなくても強い意志を持って行動した。道徳的価値を分析する言語力とそれを内面化する思考力、また主

²⁰ *ibid.*, p.339.

²¹ *ibid.*, p.342.

²² *ibid.*, p.343.

²³ *Œuvres complètes*, p.309.

²⁴ Grande, *op.cit.*, p.350.

²⁵ *Œuvres complètes*, p.478.

体的な判断力と実行力の持ち主である。

このように、女性作家たちは、道徳観を小説に取り込むことで当時の小説批判に対抗しながら、社会から要請される価値観に服従するのではなく、そういった価値観を思考と判断によって内面化する女性を描いている。男性社会が女性に求めた「貞節」や「義務」といった社会規範を、女性は知性によって内面化し意志的に実践することができる。女性自身の能動的な選択こそが、道徳の真の実現につながると考えていたように思われる。女性作家たちは、このような新しい地平で小説の道徳性を確保し、小説の社会的意義を深めようとしたのである。

おわりに

17世紀の女性作家たちが当時の典型的な女性とは異なる人生を歩んだことと、小説というジャンルがベル・レトルと呼ばれる正統派文学に含まれていなかったことが相まって、女性作家たちの小説は新しい流れを作っていた。彼女たちは、歴史というアリバイを使って同時代の社会批判を展開していった。英雄的な強い男性と守られるべき弱い女性という関係が逆転し、強い女性と弱い男性が描かれる。男性同様に政治を動かす力を持ち、自由な意思決定に基づいて行動する女性たちが登場する。女性の意思が無視される結婚制度を告発し、結婚制度から解放された理想の恋愛の形を描き、男女の新しい関係性を描いてみせた。

一方で、不道徳との批判に対抗して小説の正当性を示すための自己防衛として、女性に課された貞節や良識といった既存の価値観を体現する模範的存在としての女性像を描こうとした。しかし同時に、道徳を黙認し追従する女性ではなく、分析と思考によって道徳を深く内面化し意志的に実践する新しい女性像を描いた。

フランス社会の大きな転換点で、女性作家たちは新しい視点から社会をとらえ、新しい女性像や関係性を描いていたことが分かった。また、小説の社会的意義を道徳的観点から明確にしようともしていた。こういった女性作家たちの試みは、現代に連なる近代小説の基礎となっていく。女性作家たちは、まだ弱小のジャンルに過ぎなかった小説の可能性を広げるという重要な役割を果たしたのである。